

(三) 川本卓史さんの随想集「シドニー発チュトワイエ」

本書は、銀行マンの川本さんがオーストラリアのシドニー滞在中に『日豪プレスレビュー』（オーストラリアで刊行されている日本語の月刊誌）に書き続けてこられた随筆を取りまとめたエッセー集である。目次を一目見れば明らかなように、実に楽しい書物になっている。これらのエッセーは、書かれた当時からオーストラリア在住の日本人の間では毎月よく話題にされたものであり、私もシドニー滞在中には毎月読むのを楽しみにしていた一人である。

著者の川本さんは、豪州東京銀行の頭取としてオセアニア全体の金融界を相手に活躍されてきたばかりではなく、シドニー日本商工会議所の副会頭を三期、シドニー日本人学校の理事を二期つとめるなど、日本とオーストラリアが関係する様々な場面において両国の友好関係の発展のために多大の尽力をなされてきた。実は、私自身、ごく最近まで日豪両国に関係するひとつの仕事（シドニー所在マッコーリー大学の日本経済研究所長）に携わっていたことから、川本さんより有益なアドバイスを折にふれて頂いたことを大へん有難く、また懐かしく思います。

この本は、国際的に活躍するそうした一人の日本人ビジネスマンの書いた随想集である。しかし、類書には見当たらない幾つかのユニークな特徴を併せ持った書物であると思う。

まず第一には、シドニーの美しい風景に加えて、そこにおけるゆったりしたライフ・スタイルが随所に上手に書き込まれていることである。サラリーマンが海外勤務を命じられる場合、理想とすべき勤務地として「三つのS」があるといわれることがある。その三つとは、サンフランシスコ、シドニー、そしてシンガポール（あるいは一説ではサンパウロないしシアトル）だそう。それらに共通しているのは、美しい港湾都市であるうえ、温和な気候に恵まれ、多様な文化が平和的に共生している都市である点である。日本の大都市でのせかせかした生活に比べた場合、シドニーでの生活のスタイルは多くの日本人にとって羨ましいものがある。著者の仕事振りや日常生活をさりげなく記述した文章のなかに、こうした事実が脈々と伝わってくる。

第二の特徴は、著者の教養、博識、そして豊かな経験が全編にあふれていることである。文学、音楽、歴史の話があると思えば、国際的なビジネスや交友、ゴルフ、食べ物などについても著者の一家言を聞くことができる。また、オーストラリアでの体験のみならず、著者がこれまでに勤務あるいは旅をしたヨーロッパの国々や、アメリカでの経験、さらには外国に長年住んできた日本人として日本を訪れた時の印象記もここには含まれている。

第三には、そしてこれが恐らく本書の最大の魅力だと思うが、著者の暖かい人間味が至るところににじみ出ていることである。まず、川本さんの旺盛な好奇心がここには見られる。また職場での部下や家族、あるいは日常接する人たちに対する思いやり、あるいは何ら飾ることなく自分をさらけ出すという率直な態度、そしてそれらのなかに語られる川本さんの人生観といったものが本書には現われている。さらに、肩肘はらない文章のスタイルも著者のパーソナリティの一部といえるだろう。

国際人とは、何も英語が流暢にしゃべれることではない（川本さんは英語がとても上手である）。自分なりの考え方と価値観をもち、そして思いやりと豊かな感性を身につけていることこそ、その大切な要素ではないだろうか。こうしたことを如実に語るエッセーが、こうして一冊の書物にまとまったことを心から喜びたい。

（川本卓史著「シドニー発チュトワイエ」への序文、近代文藝社、一九九四年）